〈近世女性史資料(9)〉

佩戒 女小学（2）

── 書誌・翻刻 ──

黄色瑞華*1
若林俊英*2

＊1　城西大学教授・主任研究員
＊2　城西大学女子短期大学部・助教授

一　書　誌

所蔵　城西大学国際文化教育センター。

書型　大本上・下二冊。縦二六・四センチ。横一八・六センチ。中巻を欠く零本。

表紙　厚紙の上に紺色無地の極薄紙を貼る。

題簽　中央。白紙四周枠。縦一八・三センチ。横三・七センチ。

佩戒絵入　女小学　上（中・下）。

綴糸　白木綿糸一本掛。

内題　佩（をもの、）戒（いましめ）女（をんな）小学（しやうがく）（文海堂梓行）

目次　挿絵二面（一ウ・二オ）を挿み三面（二ウ・三オ・三ウ）。

序　二丁（四オ～五ウ）、無署名。

跋　三面（一四オ～一六ウ）。艮斎主人書。

丁数　上・一七丁（挿絵六面）。下・一八丁（挿絵八面）

各面　本文・序・跋とも九行

匡郭　本文・序・跋とも縦一九・五センチ。横一四・一センチ。

柱刻　佩戒　一～一七丁（上）、一八～三五丁（下）。

奥付

享保乙巳暮春吉祥日

江戸日本橋　小河彦九郎

書肆　大坂心斎橋筋順菱町　敦賀屋九兵衛板

二　翻　刻

凡例

1　本稿は零本『佩戒絵入　女小学』（内題、佩戒女小学）の忠実な翻刻を旨とする。

2　使用漢字は原則として現行字体とする。

3　漢字ルビ、読点はすべて原本のままとする。

4　丁移り、表裏の別は」1オ・』1ウを以って示す。

5　挿絵は縮小とし、誌面の構成を考慮して適宜挿入する。

佩戒
絵入　女小学下（承前）

人の道に叶ふをすなハち天道といふなり。かくいへばとて。神をもうやまハず。天をもおそれず。うち破れといふにハあらす。よつや誠の道にふかゝらしめんため也

石清水。にごらしと思ふわか心。人こそしらね神やうくらん濁なき心ならば人の知るしらぬにハかゝハるへからず。よくおもへやつゝしめや

○獨を慎むといふ事あり。ひとりとハ人しらぬ処なり。此事ひそかに我ひとりしりぬれば。」28オ人はかつてしるまじとおもふより心のにごり外にもあらはれて。かろきハうき名をながし。おもきは身をそこなひ侍るいとあさまし。わが心に我ひとり知たる時は。万人に見わけらるゝ恥かしと思ひてつゝしミおそるべき也

○なき名ぞと。人にハいひて有ぬべし。心のとハゞいかゞこたへん

汝つねに物ぬふことによそへておしゆべし。針をさしぬるときは人はしらねども。28ウ其あとを通る糸目を見て。針をさしぬるよしあしの後に見ゆるぞかし。常の行ひもまたしか也。女は閨のうちにのミありて人にまみえねども。内にてなすことの善悪外にかくれなし。きみきけや。内に琴をしらぶれば声ほかにきこゆることよつもまたひとりをつゝしめや

○それ人の心惟あやうしとハ聖人の御こと葉也。たとひ常に色香にめでし味にもふけるまし。」29オまして。あさましきこゝろをバあらためんとふかくいましめおもへども。物に触て心うごく時は。常のいましめを忘れて。おちいる事かならずあり。あやうきものは人の心なりと知るべし

○盃に。むかへはかハる心かな。露うけじとハおもひしかども此哥をよろづの事におしひろめて。物にうつりやすき心のいましめとすべし

○色見えて。うつろふ物ハ世の中の。人の心の花にそ有ける」29ウ

○昔たれ。人の心を白糸の。そむればそまる色になしけん

人皆欲あり。耳目口鼻の欲しなぐあり。宝をむさぼる欲のミ

30オ

30ウ

にしもあらず。人の恥や。皆欲によるとあれば。ふかくつゝしみ恐るべし。たる事をしればまづしくても無欲なるあり。足ことをしらねば。富てもよくふかき有。足ことをしれる歌

○浅くとも。よしや又汲人もあらじ。我にことたる山の井の水

○常に慎恐といふ事をよく守るべし。いにしへの聖のをしへ給ふは。慎恐の外なる事なし。其つゝしみおそるゝ事をたとへて。ふかき淵にのぞむがごとく。薄き氷をふむがごとしとなん。此二つにのぞむときつゝしミおそれざれば。かならずをちいる。常に舅しうとめ夫につかへまじハり。わさにふれて物をいふにも。おりふし立居に付ても。身を守る事淵にのぞミ氷をふむがごとくおもへとなり。此心を哥につらねてはなむけにし侍る」31ウ

○恐れよや。つゝしめや常に深き淵。薄き氷をふむがごとくに年老ぬれば哥のこしさへおれ侍れども。ことハりハ至りてたふとし。つら〳〵よみふかくもてあそバゝ。あやまちなからん

○汝をよつと名付ぬるハわがつけたるにてもあらず。森氏より名付給ひぬる也。ひそかにおもへばまことにゆへある哉。それ女に四つの行ひあり。一に婦徳とハ女のとく也。才能人にすぐれたるにはあらず。立居静に」32オしてさハがしからず。身をかへりみて人の知ても恥る事なき処につゝしむこれ也二つに婦言とハ女の詞也。物いひあざやかに口のきゝたるにはあらず。よくこと葉をつゝしみていふこれ也。三つに婦容とハ女の貌なり。皃よく姿もうるハしくある事にはあらず。湯あミ髪あらふ事をこたらず。身持けがらハしからす。朝とく髪ゆひ。常にかたちをとゝのへとりみたさぬをいふ。」32ウ四つに婦功とハ女の業なり。たくミなる事人にすぐれよといふにはあらす。常に織縫わざにをこたらず。客人あれば食物などいさぎよくして。馳走するのたぐひこれなり。此四つは女の大なる徳にして。家をおさむるもの常につとめとすべき事なり。よつとよバるゝ名あからさまにおもふべからず。此四つをつとめずハよつにはあらじ」33オ

○伯母君の子となりて行なれば。常に内に居侍る間は。をしへいましめ給ふ事いさゝかも背くべからず。いとこ達をうやまひしたしむ事。あね君につかふまつるがごとく成へし。ときうつり年月をすぐるとも。このをしへを守るべし。古き文をもよみ

34オ

34ウ

ならハせ道理をもしらしめたく思ひしかども。此事かの事にいとまなければ。心ならず打過ぬる事本意にあらず。」33ウ されども嘉言一篇をばよく覚え侍れば。をこたらずよみて。しれる人に其理を習ふべし。父として子をいつくしミよき道をおしゆべきことハりなれども。今より国をへだてぬれば一言のをしへもいかでかいひつたへん。さるによりてつたなき耳に。ちかき事ばかりをあらまし書つゞりあたふる也。いひつゞけなば。浜のまさごの数よりもおほかンめれど。おさなき耳にさとしがたき事は書ても益なく。かつハ筆のちからもなければしバらくを」35オくなり。ひきくより高きにのぼり。近きより遠きに行こと。ひじりの御教へなれば。これらのひきくちかき文を見てよくおもハゞ。高きにのぼり。遠きに行のたすけにもなりなまし。とをき処を出たつあしもとよりはじまりて。年月をわたり。高き山も麓のちりひちよりなりて。あま雲たなびくまでおひのぼれると。貫之もいへるげにさることぞかし」35ウ

○常に手ならひをこたらず。織縫わざもとよりのことなればいふにおよバず。より〳〵女四書やうの文をよみてふかくたふとむへし。くり返し〳〵おもふぞよ。わが筆のあとを守らば。さゞれ石のいはほとなれるよろこびのミぞ侍らん。此文心あハたゝしき折ふし書ぬるゆへに常にこゝろにうかひし哥をもわすれて書おとしぬ。前にをしへぬるにことなる事なれども。おなしことまたいはしとにもあらず。たゞよろしかれとねがふは人」36オ

の親の子をおもふ心なれば。老の身の追〳〵にくりことかきてあたふるならし

○つとに夜半にうやまひいつくしむべき人を思ひいりて。おこたらぬを常あるといふ

○色もなき。心を人に染しより。うつろはんとハおもほえなくに

○君をおきて。あたし心をわがもたバすゑの松山浪もこえなん

此二首もまた恋のうたなれども。心常にあらんことををしへぬること葉にとりなし侍る。君とハしうとしうとめ夫をさして見るべし。きのふは肩をうち袖を引。さしも中よく見えぬるも。けふハいさゝかのことにうらみくねり。あらき浪風たちて。仇のごとくに成ぬるも世のためしおほし。これ常なき人なり。よつよ唯つねあれや」37オ

○世の中の。人の心は花染の。うつろひやすき色にぞ有ける

常なき人のさま此うたにひとしからんとぞおもふ

○まことなき人はたとひよき事いひ出しても。人かならずうたがふ。人にちぎりしこと葉のちがひぬる事いとはづかし。つゝしめやよつ

○偽の。なき世なりせばいか斗。人のこと葉の嬉しからましいつはる心よりいひ出したること葉。などかうれしからん。まことあれやよつ

○綿ならばわた。針ならバはり綿に針をつゝみぬるさましたる人いとうとまし。これやうの人を見て。よつもミづからかへり

38オ

38ウ

みて。つゝしめや
○つらからハ。唯一すぢにつらからで。情のまじる偽ぞうき
此うたのさましたる人はうるさし。ふかき人はなにはにつけていはず。かの浅はかなる人ぞ。けしからずのさまは見ゆる」39オ
○そこいなき。淵やハさハぐ山川の。浅き瀬にこそあた浪ハたて
○品かたちこそ生れ付たらめ。こゝろハなとかかしこきより。かしこきにもうつさばうつらざらん
○かたちこそ。深山がくれの朽木なれ。心は花になさばなりなん
○植てみよ。花のそだゝぬ里もなし。心からこそ身ハいやしけれよき人を見ては。われもひとしからん事をおもひ。よからぬ人を見ては。我にもあらんかと。ミづからかゑりみよとハ。孔子の御をしへいとありがたし」39ウ
○人のもとへゆきて。あるじ情ありがほにもてなしとめ侍るに。心づよくたちぬるも心なし。帰るにしほわすれて。長居するもまた心なし。あるじにいかなる用のあらんもはかりがたければ。大やうはやく立ぬるもよかるべし
○いささらば。思ひ立田の薄紅葉人の心に秋の来ぬ間に
○百のよき事ありても。ねためるこゝろいとうるさし。ねたミふかくたけ〳〵しくのゝしりぬれば。妹背の中もうとくこそはなりゆくなれ。いかで心のやハらぐ事侍らんや。高安のこほりに行かよひし人も女あしとおもへる景色もなくいたしやりければ。前栽の中にかくれ居て。河内へいぬるかほにて見れば。女いとようけそうしてうちながめつゝ
○風ふけば沖津しら波立田山。夜半にや君がひとり行らん
とよみてげるをきゝて。かきりなくかなしとおもひかうちへもゆかずなりにけり。ねたむこゝろ露なきゆへにこそ。かぎりなくかなしとハおもハせぬれ。ねたミふかきは二心しぬる本ならし。風ふけばの哥のこゝろをおもふに。つよからぬさまより読出しぬるすがたなり。すへて人の心にかどあれば言葉にあらハる。心は色もなく声もなし。ねためる心つよくて。ひさげの水のわきかへりしなといふはわけなき事ならんとぞおもふ」41オ
○力をもいれずして天地をうごかし。目に見えぬ鬼神をもあハれとおもハせ。男女の中をもやハらげ。たけきものゝふの心をもなぐさむるはうたなりとなん。此文に哥を引てよつをおしへぬるも。たけきこゝろをやハらげんためぞかし。此文に引ぬる哥おほくは好色のたねとしてよみぬる哥なれど。心のいましめにとりなしぬれば。いとよくなりぬ」41ウ
○つら〳〵ひとりまたおもふ。人のいひ出しぬる言葉も。常ある人のよきさまに。とりなしていへるは。よろしくきこえ常なき人のあしさまにとりなしぬるは。僻事にもきこゆ。人の行ひも又しかなり。よつやをのれが身は。道にくらくて人のよしあしかならずいふべからす
○人のうへ。よしともいひて何かせん。いろへばにごる谷川の水」43オ
よしとだにいふましければ。ましてあしさまにいふ事。人の本

42オ

42ウ

意ならす

○人〳〵あやまてる事あり。顔かたちは見よからんやとて。鏡を見てミづからあらためぬれど。心見よからんやとて。鏡を見る人なし。心のかゞみは何ぞとなれば。古き人の書伝へし文なり。文をかゞみとハ此心ぞかし。よつや顔かたちをうつし見る鏡は持なれば。心をうつし見るかゝみハ。父が筆のあとなりと[43ウ]おもひてをこたらずよむべし松の葉のちりうせず正木のかづら長つたへてその子むまこまでにもあたへよかしとこひねがふ

終

[44オ]

このころにいたりて女子の翫とする文ども。浜の真砂の数〳〵世に出るといへども。色につき花になり行人心かしあれば。まめなる事をしるし侍るはいとまれなり。又ハ浮屠家のをしへ盛に世におこなハるゝゆへ。其道におほれぬる人のかきをけるはすぢなき方にまとひて。かへて害のミ多く誠の道にいる事遠しいてや此佩のいましめはいにしへの聖の教へを本としていとせちにしるされ。女子のいましめとするにいちしるじき文なり。くり返し見るごとに。その志のふかきをめで侍る。こゝに慎斎の何かし。いにし年これを求めて写しとめ。櫃におさめをかれしが。まさに今梓にちりばめ。世にいのちながうせんとて。予が棲に来り巻の末に一筆しるせよかしとあるにつけて。才の短[45オ]

きをかへりみず聊(いさか)の趣(たもしき)をかき付侍るものならし

艮斎主人書

享保十乙巳暮春吉祥日

江戸日本橋

小河彦九郎

書肆

大坂心斎橋筋順菱町

敦賀屋九兵衛板